

## パリ市の中小商店支援策 (パリ市広報誌より)

(財)自治体国際化協会 パリ事務所  
野村 隆 (高山市派遣)

### はじめに

時代が「平成」に移り変わってから、早や 23 年目に入りましたが、貧しくも家族や隣近所の人々が助け合いながら賑やかな生活を送っていた「昭和」の下町の暮らしを懐かしむ映画・テレビ番組・小説が日本では流行し続けているようです。

「昭和」の下町の人々の暮らしの中心には、商店街や街角に点在する八百屋や魚屋といった中小商店が位置していたと言えるでしょう。しかしながら、近年、こうした中小商店は、コンビニエンスストア、スーパー、大規模小売店舗の出店攻勢に追われ、苦戦が続いています。

地方都市では商店街が「シャッター通り」と化したことにより中心市街地の活気が失われ、こうした地域に住む自家用車を持たない高齢者らが「買物難民」となるなど、「街の劣化」が社会問題となっています。

さて、日本からパリに目を移すと、市内のどの街区(カルティエ)にもフランス人の日常生活に必要な八百屋、魚屋、肉屋、酒屋、チーズ屋、パン屋、洋品店、靴屋、薬局、食堂、カフェ、居酒屋といった中小商店が満遍なく通りに立ち並び、日本のかつての下町に似た、活気ある街並みが形作られていることに驚かされます。

このような、多様性ある街並みが、市民生活に利便性と活気をもたらすだけでなく、世界から人々を引きつける「華の都」パリの大きな魅力となっているのは確かでしょう。

しかしながら、他方では、移民の集住などにより、こうした多様性が失われつつある街区も存在しています。また、一旦パリ市境を跨ぐと、日本と同様、大規模小売店舗やハイパーマートが幹線道路沿いに林立する風景も目立ちます。

それでは、パリ市はどのようにして、上記のような多様性ある街並みを守っているのでしょうか？この疑問に答える記事が、パリ市広報誌「à Paris」の 2010～2011 年冬号に掲載されていたので、以下にご紹介します。

### ヴィタル・カルティエ事業 (「à Paris」 2010～2011 年冬号 14・15 ページ 筆者訳)

**「ヴィタル・カルティエ(生活に不可欠な街)」事業は、  
商店主や職人が首都パリで事業を開始・再開することを応援するための事業です。**

床屋と旅行代理店が多く集まる地区として知られる 10 区のフォーブール・サン・ドゥニ通りを歩けば、「味自慢の精肉店(Boucherie gourmande)」と書かれた赤い看板を見過ごす人はいないだろう。

クリスチャン・ローランは、55 歳で新たな挑戦に立ち向かった。それは、伝統的な精肉店を開

き、40 年前に作られていたようなパテを作り、上質な肉を販売することである。クリスチャンは懐古調の店の床を指差し、「床のタイル貼りから、すべて自分でやりました」と笑った。「売上げは毎週伸びています。2 人目の従業員を探しているところです」店の経営は軌道に乗っているようだ。

彼は、夢を実現するために、パリ市の第三セクターであるセマエスト(パリ市東部整備混合経済企業)に支援を仰いだ。セマエストは、中小企業・商店を支え、幾つかの地区で急速に進展している単一業種の集中(住民に身近な商品・サービスを提供する様々な種類の商店が衰退し、単一の業種が集中すること)を抑制するため、2004 年から苦境に陥っている商店等をヴィタル・キャルティエ事業により支援している。セマエストの支援により、パリ市内の 11 地区で既に 131 もの商店が営業を開始している。

実際に、クリスチャンは大家でもあるセマエストから非常に安価な家賃で店舗を借りており、また、銀行への担保設定、権利金、店舗開業に必要な基準に適合するための諸費用、入居当初3カ月間の家賃も免除されている。

「多くの商店が閉店し、そこに卸売業者が開店している街区を確認した場合、我々は介入を行います」とセマエストの事業用賃貸物件担当責任者のサンドリス・コペールは説明してくれた。

この仕事は、全ての住民が様々な商品を手にとることができるようにと、街から街へと地を這うような根気を要する仕事である。

重点地区の中でも、17 区のジョンキエール・エビネット地区は多くの商店がシャッターを下ろし、格安国際電話サービス業が増加しているが、ここにもセマエストの支援により、約 10 店舗の商店が開店した。(格安国際電話サービス業: 店舗内に複数の電話ブースを設置し、格安料金で国際電話を利用できるサービスを提供している。主に、移民が集住する地区に店舗が集中している。)



パリ市 10 区のフォーブール・サン・ドゥニ通り (ローラン氏の精肉店は車道の右側、手前から 3 軒目の赤い店舗)



写真 2: クリスチャン・ローラン氏の精肉店



写真 3: 精肉店の店主 クリスチャン・ローラン氏



写真 4: スペイン語古書店「エル・サロン・デル・リブロ」の店主・アレクサンドル・ドゥ・ニュネーズ氏

もう一つの再生事例を紹介する。1 区と 2 区に跨るサン・ドゥニ通りの一画には、ワイン専門店、青果店、靴修理の店等、徐々に商店が回帰している。

また、書店の再開店の際にもヴィタル・キャルティエ事業は活用された。2008 年に最後のスペイン語専門書店が閉店した時に「多くの人々がとても落胆し、ぽっかりと穴があいてしまったようだった」と2010年1月から5区のフォセ・サン・ジャック通りでスペイン語書店「エル・サロン・デル・リブロ」を創業したアレクサンドル・ドゥ・ニュネーズは語る。

2009 年以來、5 区、6 区において、ヴィタル・キャルティエ事業は、カルチェ・ラタン地区における文化的な商業活動の象徴である書店の開業を支援している。アルゼンチン系フランス人の元ジャーナリスト・ニュネーズ氏にとって、この支援は決定的なものだった。「この支援がなければ、書店主になる可能性はなかったでしょう。セマエストから店舗も改装してもらったし、開業の際には、専門家から経営・事業計画に関する助言を得ることもできました」と彼は喜ぶ。

「エル・サロン・デル・リブロ」は、講演会やミニコンサート、文学に関する討論会等多彩な催しも行っている。同書店では、開業後の1カ月間で既に約2,300冊の書籍を販売した。

### 「セマエスト」とは

上記の通り、パリ市では第三セクターのセマエストが中小商店の支援・活性化に大きな役割を果たしています。

セマエストは、資本金の60%をパリ市が拠出し、1983年に設立され、パリ市11区のレピュブリック通りに事務所を構えています。イル・ド・フランス州議会とパリ市議会の議員を兼任するフィリップ・ドゥクロー氏が社長に就任しており、評議会は、ドゥクロー社長の他に、出資者であるパリ市から7名(議員4名、2・11・17区長)、預金供託公庫、不動産管理株式会社、デクシア・クレディ・ロカール(地方自治体への融資に特化した金融機関)、BRED(地域銀行)、フランス国鉄、パリ市商工会議所、パリ市手工業者組合からそれぞれ1名が委員となっています。

職員の数は約35名で、建築、都市計画、工学、法学、都市開発、金融の専門家から構成されており、出資元の各社から専門知識を有する職員が派遣されているものと推察されます。データの確認できる2004年から2008年



写真 5: 「エル・サロン・デル・リブロ」の店頭には、パリ市、セマエストからの支援を受けたことを示すステッカーが貼られていた。

「パリ市は、キャルティエ・ラタン地区の文化的な商店を支援しています」と中央に記されている。

までの年間売上高は順調に伸びており、2008年のそれは610万ユーロに達しています。

同社は、パリ市から委託を受け、都市再開発、公共施設の建築、商業・手工業者の経済活動の支援等を実施しています。代表的な事例として、パリ市東部のベルシー地区における再開発が挙げられます。この地区にはかつてワイン倉庫が立ち並んでおり、市民からは「パリ市外の田舎」と看做されていましたが、再開発により、51ヘクタールの開発地は、ショッピングセンター、シネマコンプレックス、ホテル、オフィス、アパートマン、学校、公園等からなる新都市に生まれ変わりました。「ベルシー・ヴィラージュ」と呼ばれるショッピングセンターはガイドブックにも掲載される観光名所になり、連日多くの市民と観光客で賑わっています。同社はこうした華やかな大規模開発事業と共に、ヴィタル・キャルティエ事業のような「地を這うような」地道な中小商店支援策にも取り組んでいるのです。

### おわりに

パリ市では、セマエストの専門職員が各街区に目を配り、街の多様性が失われつつある兆候を見つけると、積極的な介入を行い、商店の開業を支援するなどして、街の活力を保とうと奮闘しています。彼らの努力により、パリは今後も世界中の人々を魅了する引力を保ち続けるのでしよう。

### 【お知らせ】

当事務所が作成したクレアレポート「フランス中規模都市中心部の再活性化政策」も併せてご覧ください。

掲載ページ：[http://www.clair.or.jp/j/forum/c\\_report/cr352m.html](http://www.clair.or.jp/j/forum/c_report/cr352m.html)

CLAIR